

## 培養皮膚モデルを用いた漢方生薬の作用 (セラミド合成能)の検討

○日野 孝之、諸橋 正昭

富山医科薬科大学・医学部・皮膚科

皮膚の水分透過性の調節機能(バリア機能)には角質細胞、特に角質細胞間脂質が重要なことが明らかになってきている。セラミドは角質細胞間脂質の約45%を占め、コレステロール、遊離脂肪酸の存在下に安定した脂質多層構造を形成し角質と結合することによって保水機能を保持している。バリア機能を高めるために、種々の外用剤、入浴剤が使用されている。漢方生薬は古くから入浴剤として使用されており、生薬成分のなかではトウキ、センキュウ、ショウブなどが用いられてきた。これらの生薬のなかには保湿作用、抗炎症作用が検討され臨床上効果を認める生薬も明らかにされている。我々の施設でもアトピー性皮膚炎の患者にトウキとジオウの煎液を入浴剤として使用し、角質水分保持能や角質水分量、および臨床症状の改善を認めている。しかし、その薬理作用については十分に検討されているとはいえ、特に *in vitro* で検討を行なった報告は少ない。今回、我々は各種漢方生薬抽出エキスの作用を3次元培養皮膚モデル( TEST SKIN<sup>®</sup>; TOYOBO)を用いて、セラミド合成能を指標に検討を行なった。検討に用いた生薬は、モクベッシ、モクジ、トウキ、ニガキ、ハクツサイを用いた。何れの生薬にもセラミド合成を促進させる作用を認めた。トウキについてはさらに詳細な検討を行ない低濃度投与群(0.1mg/ml, 1mg/ml)が高濃度投与群(20mg/ml, 40mg/ml)よりセラミド合成を高めることが示唆された。